
Love Tears*

瀬戸姫那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e T e a r s *

【Nコード】

N 8 4 6 2 P

【作者名】

瀬戸姫那

【あらすじ】

ある日の夜、少女は知ってはいけない秘密を知ってしまう。それが耐えられなくて、少女はある行動を起こす。そんな時、少女が見つけたものとは……。

*プロローグ

「もう、家に居られない……」

私は自室のドアを閉めた瞬間、力なく呟いた。覚束ない足でベツトに向かい、仰向けに寝転ぶ。

しばらくはなにも考えまいと天井を見ていたのだが、大きく深呼吸すると私の頬にすーっと生暖かいものが流れた。それは止めどなく川のように緩やかに流れてゆく。

はぁー……と息を吐くと、いきなり嘔吐に似た感覚に襲われ咄嗟に両手で口を塞いだ。

このままでは何もかも、”吐き出して”しまいそうだったのだ。

私は布団にもぐつて、声を殺しながら泣いた。この声を聞かれないように悟られないようにと、小さく丸まって泣いた。

守るように自らを力強く抱きながら、ずっと夜が明けるまで……泣いた。

こんなに泣いたのはきつと、赤ちゃんの頃以来なのだろう。幼稚園に上がる頃はよく転んでいたが、痛くても必死で泣かないようにしていた。

小さい頃、涙を人に見せることが絶対に嫌だと思っていたのは確か。多分、何かのトラウマだろうとは思うけど、原因は覚えていない。

気丈というか、我慢強いというか、いわゆる意地っ張りである。

これが今でもそうなのだから、たちが悪い。

「支度、しなきゃ……」

うすらうすらと日が明けてきた頃、私は重い体を無理やり起こしてベッドから降りた。

まずタンスに向かい、中にある服全部を出した。押入れからは修学旅行で使ったボストンバックをとりだし、入るだけ服をその中に

適当に詰める。たたんだ方がいっぱい入ると思うけど、その時の私には余裕なんてなかった。

早く早くと自分自身を急かすばかりでなく、中々入らない苛立ちさえあった。

後は、携帯、充電器、財布、貯金箱。後は学校で使う教科書や筆記用具があれば十分。

それらはいつもの学校行くときにつかっているスクールバックに入れた。幸い、私は教科書はほとんど学校へ置きっぱなしなので、量が少なくて済んだ。スクールカバンを背負い、ボストンバックを肩に掛ける。

準備はOKとばかりに私は力強く頷く。

一旦息を整えて、そつとドアを開けた。

首だけドアから出して周りを見渡す。誰もいないようだが、私の隣の部屋は兄の部屋だ。慎重にと思っていたのだが、廊下にまで聞こえてくるイビキで熟睡していると分かりあまり気を留めず、兄の部屋を通り過ぎる。

一階には両親の部屋があるが、玄関に行くまでには通らない。階段を下りたら右にすぐ玄関がある。ただ気配を消して、慎重に階段を下る。

下り終えた私は玄関に置いてある運動靴を、足に宛^{あて}がった。

靴を履くゴソゴソっという音がやけに大きく響く。息を顰^{しん}めていても鼻息がうつすらと聞こえてくるぐらいの静けさ。心音すら聞こえてくるような気がする。

私は靴を履き終えて後ろを向き、ゆっくりと口を開いた。

「……………」

声とはいい難^{がた}いぐらい小さなものだった。きっと誰にもこの思いは届いてないだろうから、それでもよかった。

家に背を向けて、私は一步一步足を踏み出す。

気持ちと比例したかのように……それはだんだん早くなっていく。

知らなくてよかったことを知ってしまった。

その事実は私にとってあまりにも残酷すぎる”もの”だった。

知りたくない……知りたくないっつ。

そう心に言い聞かせながら、私は人気ひとけのない道を走り続けたのだ。

*プロローグ（後書き）

こんばんは、初めまして、瀬戸姫那です。

連載小説スタートしました。

あとがきは何かの区切り区切りに書いて行きたいと思います。

最初から重い空気ですみません。

あまりこういう暗い雰囲気なものを書いたことないんですけど、大丈夫でしょうか。

一応恋愛小説なので、あとから私の好きなあまあまな話になっていきます（笑

実はBL以外の連載は初めてで、上手く書けているか心配です。

更新は遅いと思いますが頑張って書きますので、これからよろしくお願いします。

* 1・家出少女と

“ぎゅるぎゅるぎゅる……”

お腹からなんとも情けない音が鳴った。

(そういえば、夜食食い損ねたんだった……)

私は優しくお腹をさする。

夜食をこっそり食べようと台所へ向かった際に偶然聞いてしまった話に夢中で、お腹がすいていることをすっかり忘れていたのだ。ふとその時のことを思い出して、胸が苦しくなった。

(思い出しちゃダメっ。私はなんにも知らない！知らないんだから……)

首をふって顔を強く叩き、前を向く。

家から約40分。近くにあったコンビニに寄り、私はコロコロチキンとお握りサイズのます寿司を買った。どちらも私の好物である。

「美味しい……」

歩きながら、私はそれらを勢いよく頬張る。いずれも5分もしない内に食べ終わった。

よほどお腹がすいていたらしい。

ゴミは近くにあった公園のゴミ箱に捨て、私はある場所に向かった。

本条学園と書かれた正門。ここは私がいつも通っている高校だ。目の前にある大きな門の端の小さなドアを開けようとする。だが、強く揺すっても叩いても開かない。……どうやら鍵がかかっているようだ。

こうなったら私は門を登り、ポストンバックを下に落としてからそこに飛び込んだ。

通っている学校とはいえ、これは立派な不法侵入である。だが、校舎外には防犯カメラも防犯システムもないと知っている。

しかもバレないと確信してる。私は悪い笑みを向けた。
時計を見ると、時間は六時を少し過ぎたところだ。おそらく校舎も開いてないだろう。

（中庭のベンチで少し休もうかな……）
私の下敷きになっているポストンバックの埃をはらいながら、向かった。

ただ淡々と、なにも考えずに……。

＋＊＋＊＋

「あんた、“また”なの……」

机に顔を伏せていると、溜め息混じりの声が頭から降ってくる。

（この声は……）

私は小さな溜め息をつく。顔を見なくても分かる。いや、嫌でも顔が浮かんでくるのだ。

ゆっくり顔を上げてみるが、焦点が合わない。まだ若干寝ぼけているようだ。

「何が？」

それが、ひどく気に障ったらしく、彼女は眉間に皺しわを寄せて大声を放った。

「涼音！！あんた、また家出いえてしたんでしょー！！」

彼女が指差したのは、私のポストンバック。

「そうだけど」

母親のように口うるさいのは、幼馴染の花沢美咲はなざわみさ　ミサである。

幼稚園の時から仲だけど、性格は真反対だ。

小さい頃から私に世話を焼いている。それは私が頼りなく空気のように淡々と過ごしているせい。

私自身はその生活が好きだから別にいいのだが、美咲が言うに「頼りないだけならいいけど、涼音は変に強がるから危なっかしい」らしいのだ。

それでも一緒にいるのは、なんだか言ってもこのポジションが居心地がいいのだ。私も美咲もそんなこと言わなくても分かっているし、思い合っている。

「だいたい涼音は！」

「はいはい」

私はムキになって言い返そうとはせず、美咲の問いにうんうんと平然と受け答えていく。

このやり取りは”いつもの”ことである。そしてこの煩いやりとりをクラスメートは、いつも黙認しているのだ。

クラスメート曰く”反抗期の少年と口煩い母”^{わたし}ということらしい。「ちゃんと聞いているの！？私は涼音に”悪い印象”が残ったら困るから言ってるのよ」

その言葉に私はピクリと反応眉を少し寄せた。それはちょっとした嫌悪の表れだった。いま最も私が嫌う言葉だったから。

「……………だから？」

素っ気ない態度に、美咲はついにキレた。私の机をドンと叩き、強い眼光で私を睨めつけた。

「だ・か・ら？……………あんた！！毎回毎回家出少女なんかやって！！いつかその辺の男に食べられちゃんだから！！！！」

そう激昂しているミサの後ろに大きな影がひとつ。その影は美咲の肩をとらえた。

「男に食べられちゃうだなんて、”みさき”ちゃんったら卑猥」
「黙れ」

美咲はすばやく後ろを向き、大きな拳を作りその影に大きくなげんこつこつ。

「……………ぐっ、いってえー！！！！」

影　篠崎悠真は、痛そうに頭を抱え、叫ぶ。

「大げさね。男なんだからそれくらいで大声あげるんじゃないわよ」
「みさきちゃんに、僕のことを見てもらいたくてさー」

美咲は呆れたと大きな溜息をついた。

悠真くんは美咲のお隣に住んでいて、やたらと美咲にちょっかいをかけてくる男の子。

小さいころから3人で一緒に遊んでいるのだが、その時からこの調子だ。あの頃はちょっかいだしすぎで美咲を泣かせることがしょっちゅうだった。だけど、私は知っている。

ちょっかいをだすのは、美咲だけ。

悠真くんは美咲にあしらわれても、ただただニコニコしていた。それを見た美咲も照れくさそうに笑っている。

「あのー。そのカップルいちやいちゃいしないでいいから」

その言葉に過敏に反応した美咲は、さっき以上に怖い顔で睨めつけてきた。

「カップルじゃない!」

美咲は必死に怖い顔を作っているけど、顔が真っ赤だ。面白くて笑いそうになる。悠真君も私と同じで、くくくつと笑っている。

この雰囲気になまずくなったのか、美咲はさっきまでの話題に無理矢理戻した。

「悠真のことはどうでもよくて、涼音!今日は家に帰りなさいよ」
「いーや」

今回ばかりは帰りたくないし、帰れない。

「ミサの家に泊めてえ?」

甘えた声で美咲に頼んでみるが、それは悠真に遮られた。

「それは駄目、今日は俺が行くから」

「ニコ」っていう効果音がつきそうなほどの満面の笑み。

(独占欲強いなあ……)

苦笑いも通り越して、溜息すらでない。女の私にまで、此処までの独占力を見せつけてくる。

仮にも私も幼馴染なんだけど?って言うてみようかなと思うが、

悠真という男には通じないとなんとなくわかる。

（本当に悠真くん、美咲のこと好きだよね……）

「そういうことならいいけど？」

しょうがないかと、次の思惑を考えていると、何やら喧嘩声（？）がする。

「何言ってるのよ！悠真！」

「何って何が？」

「そんな約束してないわよ！」

「そんな約束って、みさきちゃんの家に行くこと？」

「そっそっよっ」

「ああーじゃあ、約束すればよかった？」

「そう意味じゃないわ」

「じゃあ、みさきちゃんが思ってることをちゃんとやってよ？」

「悠真の……悠真の……ゆうまのばかぁ……！！」

何、朝からイチヤツいてるんだ、あのバカップル。

二人を見ているクラスメートらは、きっと心の中で溜息をついているだろう。

クラスの中にそんな空気が流れているとは知らないだろう二人はまだ言いあっている。

こんなやりとり聞けば誰もが二人は恋人だと思うけど、実は二人付き合っていない。カップルの自然消滅であるけど、この二人の場合自然成立？って感じだろうか。

どちらかと言えばいいと思うだが、二人の性格上難しい。

私が手助けしようと思ったこともあるのだが、美咲は絶対認めようとしていないタイプだし、悠真くんは言っているようにみえて、実は怖がっているのだ。漂々とした言葉じゃきつと伝わらない。それは悠真自身も分かってるから口は出していない。

実質見守ることしかできない。いろいろと口出せばきつと余計なお節介だろう。

私は席を勢いよく席を立った。

「じゃあ、その夫婦！私もちよつと行つてくるから！」

ボストンバックを持って、私は教室を出ようとする。

「ちよつと……ってまさか涼音、またアイツの所に行くの？」

美咲はちよつと嫌そうに、アイツと言葉を吐いた。

「そうだよ。だって今日宿なしだもん、頼みに行かなきゃっ」

美咲と反対に、悠真君は盛大に送り出してくれる。

「行つてらっしゃい、涼音。具合悪いとでも先生に言つていてやるから」

「ありがとう、悠真くん」

悠真くんに軽く礼を言い、私は教室を飛び出した。

スキップするように廊下を走っていく。階段で転びそうになるくらいはしゃいでいた。

（この時間に行くの、久しぶりだなあ……）

始業時間間近、教室と反対方向に行くのがおかしかったのだろう。

私のクラスメートが不思議そうに声をかけてきた。

「あれ、涼音？何処に行くの？」

「ん？先生のところ！」

クラスメートはそれだけで分かったらしく、うんと頷いた。

「ああー大好きな先生のところに行くのね。いつてら〜」

そう。私が向かっているのは、大好きな先生のところ……

…。

* 1・家出少女と（後書き）

こんばんは。瀬戸姫那です。

どうやらスランプに入っただようです。

最初の投稿から随分あいてしまいました。

書きたいけど、文が上手く書けないという状況です。書かなければいいのかなと思うのですが、書きたい衝動があり精神的にうまくいきません。

一応ストーリーは考えてあるので、続きを書いて行きます。

続きをどんどん書いて行くと波に乗っていくタイプなので（笑
この話については、スランプが抜けた頃に内容が崩れないように、
文の修正を行いたいと思います。

中途半端でごめんなさい。

凍結だけは避けたいので、頑張って書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8462p/>

Love Tears*

2011年1月12日23時55分発行